

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第1回）
（令和6年6月18日）

■日時 令和6年6月18日（火）14時00分～16時00分

■場所 長野県庁本館棟8階教育委員会室（Web会議システム併用）

1 開会

（水野課長）

ただいまから、第1回「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議を開催いたします。私は、本日の司会をつとめます、長野県教育委員会事務局教育政策課長の水野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日ですが、16時終了を目途とさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでははじめに、長野県教育委員会教育長、武田育夫より御挨拶を申し上げます。

2 教育長あいさつ

（武田教育長）

開会にあたりまして、一言御挨拶を申し上げます。はじめに、構成員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中にも関わらず、本会議の構成員をお引き受けいただき、厚く感謝申し上げます。

私も長く教育の現場に携わってきた身ではありますが、今思うと、学校の仕組みや、自分のやりたい授業に、子どもたちを押し込めてきたのではないかということを思っています。一斉一律や、あるいは教員主導ということを、私もしてきたのではないかということを思っているところです。

また一方で、学校のあり方、授業のあり方、教員のあり方が限界に来てるのではないかということも思います。不登校の児童生徒が増えているということであったり、特別支援学級が年々増加していることであったり、教員の多忙化や志望者の減少等は、今までの学校の仕組み、システム、授業のあり方に限界が来ていることのサインなのではないかと思うところです。

私たち県教育委員会は、こういった状況の中で、子どもたちの個性や、あるいは子どもたちのこだわること等が認められ、その子らしく学んでいける、その子らしさが実現できる、そういった学校ができないものかということを考え始めたところです。

それが今回御議論いただく、一人ひとりに合った学びが実現する学校（仮称）と、こんなふうと呼んでいるところであります。本会議では、有識者の皆様方から、一人ひとりに合った学びが実現する学校ってどんな学校なんだろう？一人ひとりに合った学びが実現する学校ってどうやって創っていけばよいんだろう？そういったことについて、いろんな角度から自由に御意見をいただいて、私たちのこれからの参考にさせていただきたいし、それを具

体化していきたいというふうに思うところです。

長野県に、一人ひとりが自己実現できるような学校がたくさんできていくこと、そのことをこれから取り組んでまいりたいと思っているところです。

構成員の皆様方には、それぞれのお立場から忌憚のない御意見をいただき、長野県の子どもたちのよりよい学びのために、活発に御議論いただけたらと思います。本日はよろしくお願いいたします。

3 自己紹介

（水野課長）

それではここで、本日の配付資料の確認をさせていただければと思います。

次第、構成員名簿、座席表、開催要項、そして本日のメインの資料である資料1「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」のたたき台と、本日議論したいポイント」。

以上ですが、お揃いでしょうか。

それでは、本日はこの検討会議の初回でございますので、皆様から自己紹介をいただければと存じます。

本日は、熊谷様、島谷様、下山様、早坂様は、オンラインにより御出席いただいております。名簿の順番でお願いできればと思いますので、まず熊谷様からお願いいたします。

（熊谷構成員）

皆さんこんにちは。熊谷弘と申します。

所属は長野県PTA連合会でございますが、私が住んでいるところは、長野県の飯田市でございます。今年で創業50年になりました株式会社リックスの代表、電気屋をやっております。日々はそういう経済活動をしながら、PTAの方では平成24年から関わらせていただき、平成28年に県PTA連合会の副会長をさせていただきました。長男が今24歳で長女が22歳、そして今小学校6年の次男がおりまして、それを機にまた会員復活ということで、2020年から、コロナと同時に県PTA連合会の会長を3年間させていただき、信濃教育会の当時の武田会長にも、色々と御指導いただいたわけでございます。

現在は、長野県PTA連合会顧問、また日本PTA全国協議会の常務理事も務めさせていただきまして、来年10月18～19日に行う関東ブロックながの大会の実行委員長の役職もいただき、活動しております。

県教委の皆様にもいろんな所で御挨拶させていただきましたが、引き続き、PTAの立場で参加させていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（水野課長）

ありがとうございました。続きまして、島谷様お願いいたします。

（島谷構成員）

皆さんこんにちは。石川県加賀市で教育長をしております島谷千春と申します。

今回、構成員の中で唯一、多分長野にゆかりのないメンバーとして参画させていただきま
す。このような機会をいただきまして、ありがとうございます。

石川県加賀市では、まさに武田教育長がおっしゃられた理念と同じものを目指していま
す。子ども一人ひとりが活躍できる授業ってどういう形があるんだろう？ということで、従
来型の一斉型の授業からも脱却して、一人ひとりに合ったペースで、みんなで協働して、授
業を作り上げていく。そんな今までなかった形を、本当に苦しみながらですが、試行錯誤し
ながら、市内全校一斉に取り組んでいるところでございます。

その辺の苦労話も含めて、進んでいる部分、それからやっぱり難しさを感じる部分、色々
ノウハウが貯まってきていますので、その部分に関して役立つものがあるのかなと思いな
がら、参画させていただいています。

石川と長野では、教育や学校の文化もだいぶ違うところがあるんだろうな、というふうに
思います。私自身もたくさん勉強させていただきたいと思っておりますし、長野県の子も
たちが一人ひとり、今よりしあわせになるような学校が1つでも増えるように、私も微力な
がら尽力させていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

（水野課長）

ありがとうございました。続きまして下山様お願いいたします。

（下山構成員）

はい、下山真衣と申します。皆様こんにちは。よろしく申し上げます。

所属は、信州大学教育学部特別支援教育グループということで、普段は発達障害のあるお
子さんや知的障害のあるお子さんの学びについて、学生さんと一緒に勉強したり、研究した
りしている次第です。

発達障害のお子さんや知的障害のお子さん自身や、学校の先生、保護者の方から相談を受
けることが多くて、やっぱり学校に行く時間というのは、子どもにとってはすごく長い時間
であり、その中で子どもたちが自分に合った学びがなかなかできなくてつらい思いをして
いる現状なんかもございます。また、それ以上に、友達が欲しいとか、学校が大好きで安心
して過ごしたいっていう子どもたちのニーズが満たされるような、そんな学校づくりがで
きたらいいな、なんて普段考えている次第です。

本日はこのような貴重な機会の会議に参加させていただけることを、本当に楽しみにし
ております。先生方からも学ばせていただくことが多々あるなと感じておりますので、どう
ぞよろしく申し上げます。ありがとうございます。

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第1回）
（令和6年6月18日）

（水野課長）

ありがとうございました。続きまして茅野様お願いいたします。

（茅野構成員）

はじめまして、信州大学に勤めております、茅野公穂と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私の専門は、数学教育学で、どちらかという学校では「ちょっと苦手かな」なんていうふうに言われることが多いかもしれませんし、別の意味で言えばSTEAM教育のような形で、算数・数学にとどまらず、もう少し広い文脈の中で学びを深めようなんていうことにも関わってきているのかな、というふうに思っております。

このような機会をいただきましたことを感謝すると同時に、微力ながら貢献したいなと思っておりますどうぞよろしくお願いいたします。

（水野課長）

ありがとうございます。続きまして早坂様お願いいたします。

（早坂構成員）

皆さんこんにちは。早坂淳と申します。上田市にある公立大学長野大学社会福祉学部にも所属しております。

専門は、教育学の中の教育方法学という領域がございまして、教育方法学というのは、簡単に説明すると、教育の理論と実践があったときに、その両者を行ったり来たり往還しながら、理論で分かったことを教育現場に翻訳したり、あるいは教育現場で得た知見を学会に戻して理論化したり、そういった翻訳者のような業務を日々研究しております。

私、長野県に参りまして14年目になります。ここ長野・信州は、非常に社会教育が充実した地域であり、多くを学ばせていただいています。今、主としては、コミュニティスクール、地域と学校との連携・協働といったところに、私の研究リソースの多くを注ぎ込ませていただいております。

今日は、普段から大学で教員養成に携わっているというところもありまして、これから若い人たちが現場でしあわせになっていくという観点もぜひ取り入れつつ、一人ひとりに合った学びの実践を共に考えさせていただく貴重な機会をいただきましたので、微力ながら精一杯努めさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

（水野課長）

ありがとうございました。続きまして長野県教育委員会の出席者の自己紹介を行いたいと思います。改めまして教育長から名簿順にお願いいたします。

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第1回）
（令和6年6月18日）

（武田教育長）

長野県教育委員会教育長の武田育夫と申します。よろしくお願いいたします。

（米沢次長）

行政の教育次長をしております米沢一馬と申します。よろしくお願いいたします。

（曾根原次長）

同じく教育次長の曾根原好彦と申します。よろしくお願いいたします。

（小池課長）

義務教育課長の小池徳男と申します。よろしくお願いいたします。

（中原教育幹）

特別支援教育課教育幹兼指導係長の中原直樹と申します。よろしくお願いいたします。

（臼井課長）

学びの改革支援課長の臼井学と申します。よろしくお願いいたします。

（一色教育主幹）

学びの改革支援課義務教育指導係長の一色保典と申します。よろしくお願いいたします。

（召田課長）

心の支援課長の召田誠と申します。よろしくお願いいたします。

（市村課長）

生涯学習課長の市村由紀子と申します。よろしくお願いいたします。

（水野課長）

教育政策課長の水野恵子と申します。よろしくお願いいたします。

（小池企画幹）

教育政策課企画幹兼課長補佐の小池誠と申します。よろしくお願いいたします。

（石川係長）

同じく教育政策課企画係長の石川直樹と申します。よろしくお願いいたします。

（中村担当係長）

教育政策課企画係担当係長の中村政俊と申します。よろしくお願いいたします。

4 座長選出

（水野課長）

それでは続きまして、座長の選出についてお諮りさせていただきます。

本会議では、開催要項第4の規定により、座長を置くこととされております。本会議の座長につきましては、事務局から指名をさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか？（異議なし）

ありがとうございます。それでは信州大学教育学部の教授として、長野県教育全般に見識をお持ちの茅野様をお願いしたいと存じますが、皆様ご賛同いただけますでしょうか？（賛同）

ありがとうございます。茅野様、お願いいたします。それでは早速でございますが、一言ご挨拶をお願いしてもよろしいでしょうか？

（茅野座長）

分かりました。先程も申し上げましたように、私は普段は数学教育という教育の中では本当に狭い窓口から教育を捉えている者なんですけど、なにぶん力不足でございます。会議に出席の皆様のお力添えをいただきながら、会の冒頭でも話題にありましたけど、一人ひとりの学びが確かで豊かなものになることの実現を目指して、この会議を進めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（水野課長）

ありがとうございます。それでは、以降の会議の進行は、座長をお願いしたいと思いますので、茅野様、よろしくお願いいたします。

（茅野座長）

分かりました。不慣れですがよろしくお願いいたします。

それでは、議事に入る前に、この会議の公開についてお諮りしたいと思いますので、事務局からご説明をいただけますでしょうか？

（石川係長）

はい。お願いいたします。長野県が設置する審議会等につきましては、指針というものがあるんですけども、この指針に基づきまして、原則公開とされております。従いまして、例外として個人情報を含むような場合には非公開としますが、その他は公開で行いたいと考

えております。この会議においては、非公開はあまり想定されないかなと考えております。

公開の方法については、会議の傍聴および会議結果の公表により行うこととされておりますので、会議の傍聴を認めますとともに、会議資料および議事録、またアーカイブ動画を長野県教育委員会のホームページに掲載する等の方法により、公表させていただきたいと考えております。

また、このため、会議の様様を録音録画させていただきますので、ご了承くださいませよう、どうかよろしく願いいたします。

（茅野座長）

皆様よろしいでしょうか？ありがとうございます。それではお認めいただいたということで進めたいと思います。

それでは早速、議事に入りたいと思います。

5 議事

（茅野座長）

意見交換を中心に進めていきたいと思いますが、その前に、一人ひとりに合った学び実践校（仮称）ということで、たたき台と本日議論したいポイントについて、事務局よりご提案をいただいておりますので、まずは事務局から御説明いただき、その上で意見交換としたいと思います。それでは事務局からよろしく願いいたします。

（石川係長）

それでは説明を始めたいと思います。資料1をご覧ください。

2ページ目をお願いします。まずこの取組の位置付けについてです。長野県の総合5ヶ年計画、しあわせ信州創造プラン3.0というものがあまして、その中に8つの新時代創造プロジェクトというものがございます。そのうちの1つで本県の知事の思いも強い、「個別最適な学びへの転換プロジェクト」の根幹をなすものが、この一人ひとりに合った学び実践校（仮称）の取組でございます。

この実践校の目指す姿は、資料赤字で書いてあります通り、すべての子供が「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求するための、一人ひとりに合った学びを自ら選択できる状態としております。

次、3ページ目をお願いします。この検討会議で御議論いただきたいことですが、変動性や不確実性等といった昨今の社会情勢、そして価値観の多様化、さらには少子化人口減少が加速化する中、教育の方向性については、一斉一律の教育から個別最適な学びへ転換するとともに、協働的な学びについても一体的に推進していくことが必要です。そうすることで、新しい価値や、より良い社会を創造する力が育まれるというふうに考えます。そ

のために我々県教委では、小学校や中学校を想定し、一人ひとりに合った学びの実践校を創りたいと考えました。

しかしながら、小学校や中学校を運営するのは学校、あるいは先生、市町村教育委員会やそれぞれの地域ですので、この実践校の取組を適切に進められるよう、有識者の皆様の幅広い御意見を頂戴しながら、この資料の下の方に枠囲みにあるような事項について整理をしたいというふうに考えております。この実践校は誰のためにあるのかについては、子どもを中心に据え、その上で、何を目指して実践校を創っていくのか、どうやって創るのか、創るにあたっての関係者の役割分担や、県としてどのような支援をしていくことが望ましいか等について、御議論いただきたいと考えております。

次、4ページ目をお願いします。本日御議論をお願いしたいポイントがこのページです。大きく2つありますが、1つ目の「一人ひとりに合った学びが実現する学校とは？」については、理想像のイメージをすり合わせたいと考えております。子どもたちが自ら学びを選んではいけるようになれば良いと我々は考えておりますが、いかがでしょうか？また、それにより、理想像として掲げる子どもたちの自己実現ができる学校に近づけるのではないかと我々は考えておりますが、いかがでしょうか？等について御意見をいただきたいと考えております。

2つ目、「一人ひとりに合った学び実践校をどうやって創っていけばよいか？」については、取組の進め方について御示唆をいただきたいと考えております。例えば、地域の独自性を入れながら実践校を創っていく際に、学校、地域、市町村教育委員会は何をすればよいのか、あるいは県は実践校をどのように選んでいけばよいのか、まずは実際に実践し、その知見を他の学校に横展開する形で進めていきたいと我々は思っておりますが、いかがでしょうか？あるいは県がどんな支援をしていくことが必要と考えますか？等について、御意見をいただければというふうに考えております。

次の5ページ目をお願いします。この絵は、今年の2月に長野県の令和6年度当初予算を公表した際に、公表させていただいた資料です。この絵はあくまでもイメージでございます。真ん中の辺りにある通り、例えば、教科の中で自由進度学習、あるいは従来の一斉授業やグループ学習、また情報化が進んだ時代ならではのオンラインやメタバースを活用した学習、あるいは真ん中付近にありますけども、認知発達特性に応じたアセスメントツールの活用であったり、通級指導教室の在り方、こういったことが1つの学校の中で取り組まれ、その結果それぞれの子どもたちが自分に合った学びを選択することができ、しかもそれぞれの学びを自由に行き来することができる。ある子があるものを選んだけれど、やっぱりうまくいかないと思ったら別のものを自由に選んだりすることができる。こうした学校が、子どもたちの自己実現ができる学校なのではないかと考えたところでございます。そして、資料の下の方に赤字でありますけども、こうした実践校を地域とともに創り、また教員の資質能力の向上の場としても活用できないかというふうに考えているところです。

次、6ページ目をお願いします。なぜ実践校を創ることによって取組を進めたいと考えた

のかについてです。長野県は全国で2番目に多い77市町村が存在しており、それぞれの地域で独自の文化が育まれています。また、長野県教育の特徴として、常に子どもが中心で、学校も自立的な風土を持っており、既に一人ひとりに合った学びというアイデンティティのようなものが、長野県の各地域には根付いているというふうに考えております。そのため、長野県の全域で一律で同じような取組を進めていくのではなく、各地域各学校が自分たちに合うように実践してみる、そして県はそれぞれの地域や学校のやりたいことをしっかりと支えていくことが大切だというふうに考えております。

次、7ページ目をお願いします。ただいま御説明したような、目指したい状態のイメージ図でございます。右上に小さく記載しておりますが、長野県のスタンスとすれば、やり方の再現性を高める、いわゆるコピーアンドペーストということではなく、実践から学び、その勘所を体系化することで、他の学校での実践に当たっての材料にするといったような支援のイメージを持っておりますが、いかがでしょうか？

次の8、9ページ目をお願いします。8ページ目では、具体的な実践校の要件、下の方には、とりあえず案として様々なものを並べております。次の9ページ目では、実践校の取組に対して必要な支援、あるいは実践校の取組を横展開していく上で必要な支援について、あくまでもたたき台としてまとめてみたものでございます。

次、10ページ目をお願いします。これは先ほど御説明した4ページ目と全く同じものを再掲として掲げています。本日はこれらのことについて御議論をお願いしたいと思っております。

最後になります、11ページ目です。この検討会議の全体的なスケジュールのイメージでございます。第2回を7～8月頃に、第3回を9月頃に行いたいというふうに考えているところです。この短い時間の中で恐縮ですが、この全3回の会議で、ある程度の方向性をまとめ、その後、秋以降に我々県教委から市町村教育委員会等関係者の皆様に御説明したり、あるいはその実践校に手を挙げていただくような学校の募集というものを行っていきたいと考えているところでございます。

事務局からの説明は以上です。本日はよろしくお願ひいたします。

（茅野座長）

ありがとうございました。ただいま事務局から説明がありましたが、構成員の皆様から御質問等ありますでしょうか？

（早坂構成員）

1つよろしいでしょうか？御説明ありがとうございました。事前に資料を読んだ分と、また今御説明いただいたことで、非常に理解が深まりました。

冒頭でちょっと確認させていただきたいのは、今回の資料の初めのところ、本取組の位置付けと書かれているところですが、今回我々が議論すべき内容が、しあわせ信州創造プラン3.0、ここの中の8つのプロジェクトのうちの1つに位置づいているものだったということ

がよく分かったのですが、今同時に進んでいる第4次長野県教育振興基本計画がありますよね。そこの関連でいうと、どんなふうに位置付けられるのか。今ちょうど第4次長野県教育振興基本計画の2年目というところで、そこの関連性についても教えていただけたらと思います。どこを意識して議論していけばより発展的な議論になるのか、といった点で、御示唆いただけたらと思います。

（石川係長）

ありがとうございます。まず、このプラン3.0と第4次長野県教育振興基本計画の関係性、繋がりなんですけども、大きな方向性は全く同じでもって策定しております。第4次長野県教育振興基本計画の目指す姿では、「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求できるということを記載していますが、今回の資料1の2ページ目、プロジェクトの目指す姿も、すべての子どもが「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求するための一人ひとりに合った学びというふうに、同じところを掲げています。

（早坂構成員）

御説明ありがとうございました。今回の資料の右上ヘッダーのところに記載されている「個人と社会のウェルビーイングの実現」というところが、まさに第4次長野県教育振興基本計画の柱となる理念なのかな、というふうに理解しております。今回の、一人ひとりに合った学び実践校を推進していくプロセスでも、関係する全ての人がしあわせになるような、そういったところを意識していく必要があるのかなと、今の回答で、理解させていただきました。ありがとうございました。

（茅野座長）

ありがとうございました。今のような、前提となることでも構いませんので、何か御質問等がありましたら、声を上げていただければと思いますがいかがでしょうか？はい。島谷さんどうぞ。

（島谷構成員）

御説明ありがとうございました。何というか、変えていこうという野心的な資料の内容で、本当に事務局の思いが伝わってきました。

1つ前提といいますか、考え方として、とんがりの学校を創っていくのか、それともその学区に住んでいる子が普通に行くような公立学校の横展開を目指していくのかによって、結構考え方が変わっているんですね。長野県ってやっぱり風越学園とか大日向とか、私立で独自の方向性を実現しているところが多いと思うんですけども、やっぱり私立と公立の違いって、子どもが選べないとか、私立は親が教育方針に賛同して選抜を受けているとか、やっぱりそのとんがり方のレベルっていうのも、公立と私立で見えていかなきゃいけない

部分が結構出てくるなと思ってるんですね。

おそらくは、市町村立の義務教育の話だと思うので、県立でとんがった学校を創るっていうような話ではなく、横展開を目指していくような形で議論をしていくのかなとは思っているのですが、その辺の前提、スタンスをどう考えればいいのかについて、明確化しておいた方がいいかな、というのは少し感じています。

（武田教育長）

端的に言うと、公立の枠の中で最大限にとがった学校を創りたい、そういうことです。

（茅野座長）

はい、分かりました。ありがとうございます。後の方の議論にも関連すると思うんですけど、実践校を選びながら横展開をしようといった方向性にも関わる御質問だったのかなと思いました。その他ご質問いかがでしょうか？

よろしいでしょうか？もし途中で御質問等がありましたら、適宜声を上げていただければと思います。それでは、意見交換に入りたいと思います。

先程のお話の中で、事務局から、一人ひとりに合った学び実践校のたたき台と本日議論したいポイントということで御説明がありました。その中で、議論のポイントが2つございました。一人ひとりに合った学びが実現する学校とは？という、我々がイメージする理想像のすり合わせを図りたいという話がありました。まずこの辺りから議論を進めたいと思いますが、皆さんいかがでしょうか？一人ひとりに合った学び、それが実践されている、展開されているって、どんなイメージでしょうかね？

（早坂構成員）

よろしいでしょうか？ちょっと口火を切らせていただけたらと思います。私の一人ひとりに合った学びが実現する学校のイメージなんですけれども、もうこれは端的に言って、「子どもの前に世界を用意する」ということそのものなのかな、というふうに考えています。

昨今の脳科学や神経科学の発達によって、子どもたちが実に多様であるということ、一人ひとりが本当に全く違う存在で、同時にかげがえのない存在であるということが明らかになっている。そこを踏まえると、子どもの数が減っている中とはいえ、子どもたちの多様性が、これだけカラフルに私たちの目の前にいる中で、その子たちが一人ひとり自分に合った学びを見つけることができるとなると、それはやっぱ旧来の学校の校舎の中にとどまって人為的・作弄的なものだけでは、限界があるだろうなって思います。

子どもたちの目の前に、公教育としてどう世界を用意してあげるのか。これが一人ひとりに合った学びの実現っていうところの答えになるのかなと。さつき島谷さんもおっしゃってましたけれど、非常に野心的な試みですね。これからの教育を考えられるっていう点で非常にわくわくするというか。リアルワールド、外にある世界と子どもをどう接続させるか

っていうところが、またポイントになってくるのかな。そんなふうに考えました。口火としては、以上で閉じさせていただきます。

（茅野座長）

ありがとうございました。それを受けて、皆様また思うことがあるかと思えますけど。いかがでしょうか？

（島谷構成員）

早坂先生の「世界を用意する」という言葉にちょっとつられてといますか。今、加賀市で、本当に長野県教育委員会さんが思っていることと同じ思いで授業づくりをやっているんですけども、私も授業を見ていて、「これは一人ひとりに合ってるな」と思う瞬間というのは、やっぱり自分で選択できる環境があるというのが大きいなと思ってるんです。

もちろん、子どもたちがやらなきゃいけないことっていっぱいあるんですけど、やらされてるって思わずに、自分で決めて選択してやれている、要は選択できる世界って早坂先生おっしゃいましたけど、教室なり学校の中の環境設計の柔軟化っていうのが、その子ども一人ひとりに合った部分を実現するためには、すごく重要な要素になるなと思っています。

ハードもちろんそうなんですけれども、ソフト面でもやっぱり子どもが自分で選んで自己選択ができる環境プログラムをどれだけ用意できるかというのは、一人ひとりに合うっていう意味では必須な部分かな、というふうに思っています。

（茅野座長）

ありがとうございました。別の言い方をすれば、子供たちに委ねられている部分が今より広がっていく。拡張していく。そんなイメージかもしれないなというふうに伺いました。

続いていかがでしょうか。例えば、先程親御さんの立場からということもありましたけど、熊谷さんいかがでしょうか？

（熊谷構成員）

はい、ありがとうございます。参加者の先生方と比べたら専門性もなく、PTAの経験の中でしかお話ができませんけど、先程武田教育長がおっしゃっていた、公立の枠の中でとがった学校を創るというのは、すごく重要ななと思っております。信州、日本を変えてくような、そんなエネルギーを持った学校ができるのではないかなとも思っております。

一人ひとりに合った学びを実現する学校づくりにおいて思ったことなんですけど、子どもたちが“自ら学び”という部分です。自己肯定感をいかに高めていくかが、要素的には重要なのかなと思います。

箱だけつくってそこで良いことを言っても、やはり子どもたちが自発的に選んでいけるような、その状態に持っていけないとまずいかなとも思っております。どういう形で、自

己肯定感をいかに高めていくか。ここが高まってくれば、諸課題もなくなってくるだろうし、子どもたちが自らカリキュラムをつくるとか、今までにないような学習ができる。そして、早坂先生がおっしゃった子どもの前に世界を、という点で言えば、自己肯定感を高めるということは、ポジティブ心理学とかが要素としてあるのかなと思います。

ある先生が、「子どもに親切をさせてください」とおっしゃっていました。そこには、繋がり、有用性、自発性の3つの要素があるそうです。要は、何か親切をするっていうのは、1人ではできないから、まず人との繋がりができる。次に、親切をすることで“できる感”が養える。そして、別にやらなくても生きていけるその親切をまたやろうっていう“自ら感”が養える。それが内発的なウェルビーイングに繋がっていくということもおっしゃっていました。

何が言いたいかというと、“自ら学び”っていう部分、つまり自己肯定感をいかに高めていくかっていう、カリキュラムやプロセスが重要かなと。だから幼児期の幼稚園保育園のところからも色々と仕掛けていくとかも大事かなって、率直に感じたところです。以上です。

（茅野座長）

ありがとうございます。親切のお話から、他者を意識することも大事なんじゃないかっていうこととともに、一方で自己肯定感というのは他者がなくてもあるかもしれませんし、他者を意識するからこそ自己肯定感、ということもあるかもしれないな、と思いながら話を伺いました。一通りお伺いしようと思います。下山先生いかがでしょうか。

（下山構成員）

はい、ありがとうございます。早坂先生の、子どもたちの前に世界をっていうのは、すごく魅力的だなと思いながら、その話を聞いてふと思いついたことがあります。

発達障害のお子さんが普通のクラスにいと、算数・数学とか英語の授業とか漢字を書くときになると、うつむいちゃって、みんなとはいるんだけどとても孤独だったり、孤立しているような状況があります。一方で、例えば椅子づくりみたいな、体験的だったり、現実味・真実味があるような学びのときには、いきいきして自ら率先して、「これどうしようかな？」って探究的に考えたり、普段だとなかなか友達に話せないのに優しく「これはこうしたらいいんだよ」と元気に話せたりする。そういう子どもたちの姿を見ていると、皆さんがおっしゃったような選択肢があるとか、自己肯定感があるとか、学びに現実との連続性があるとか、そういったことが本当に大事なんだなって、思いを持ったところです。

そういった学びを実現していく土壌みたいなものが非常に重要で。多様な子どもっていうフレーズがずっと出ているんだけど、それを学校がどのくらい想定できているかということが大事になる。さっき言っていたように、特定の教科になると非常に自信をなくして身を小さくしているんだけど、一方で得意なところでいきいき活躍できたりする子もいたりとか、あと勉強は非常に苦手なんだけど心優しく友達と関われる子がいたりとか、非常に勉

強ができるので授業でノートを取る理由がわからない、宿題をする理由がわからない、でももっともっと創造的な学びがしたいと思う子がいたりとか。非常に幅広い状況のお子さんがあるので、学校自身が「多様な子ども」と一括りにせず、具体的にどういう子どもたちにどういう学びが合いそうかなってという仮説を立てながら考えていくことができる学校がいなくなって思うのが1点。

また、子どもたちがその違いがあるってことは、もちろん摩擦も生むわけなんですよ。でもその摩擦を乗り越えて仲間として地域の学校で一緒に過ごすことが、インクルーシブには求められるところですので、ただ単に学んでいる人たちだけじゃなくて、仲間同士お互いが尊重できるようなクラスづくり・学校づくりが重視されることが大事なんじゃないかな、なんていうふうに思っているところです。

例えば、これから自由進度の学び方なんかも出てくると思うんですけど、その中で結局、「あの子はそこまでしか勉強できてないけど自分はここまでできたんだ」みたいな発言って、出てきちゃうんですよ。友達を大事にする気持ちとか、自分自身を大事にする気持ちが育まれれば、そういった問題も解消できるんじゃないかなと考えております。以上です。

（茅野座長）

ありがとうございます。インクルーシブといった観点からお話をいただきました。一通りお話をいただきましたけど、皆様のお話を伺った上でご発言があればいただければと思いますが、いかがでしょうか？

島谷さんの後に早坂先生という形をお願いします。

（島谷構成員）

まだ仮称の状況なんですけど、ネーミングで印象が変わるなと思ってます。事務局資料では、すごく小さく、「今回の一人ひとりに合った学びは、個別最適な学びの話だけじゃなくてみんなで学ぶ協働的な学びの要素もあるよ」と書いてあって、そういう要素が踏まえられていることはきちんと読めば分かるんですけど、ネーミングだけ見ると完全に個別に寄っている印象を、一般の人は受けると思うんですね。で、それって学校現場も一緒に、「子どもが自由に自分たちのペースでそれぞれがバラバラに」みたいな印象論で入ってしまう恐れがあり、広げるときにネーミングって割と邪魔をするところもあるなと思ってます。今ぱっと知恵は出てこないですけど、一人ひとりに合った学び、確かにそうなんだけど個別に寄りすぎない、下山先生がおっしゃったような摩擦を乗り越えていく力とか、学級づくりとか子ども同士の関係性づくりって大事だなって、私も現場を見ていて思うので、やっぱり協働性みたいなニュアンスも入るといいなと思います。ちょっと知恵は今ぱっと出てこないんですけど、ネーミングは割と大事だなと思います。

（茅野座長）

ありがとうございます。続いて早坂先生お願いします。

（早坂構成員）

ありがとうございます。事前に言おうと思っていたことがありましたが、今の島谷さんのお話を受けて「それだよな」と思って、ちょっと記憶が吹っ飛んでしまいました。今おっしゃっていただいたことに私は心から賛同するんですけど、個別最適を学校の中で実現させようとしたときに、必ず両輪にならなければいけないもう片一方の要素を、どうネーミングの中に活かすのかっていう論点は、私達がこの会議体の中でしっかり答えを出さなきゃいけないことの1つだろうなっていうふうに思います。

要は、協働なしで、人との繋がりなしで、個別最適ってできないんだと思うんですね。本当に一人ひとりバラバラなことをやることを長野県が目指しているというよりは、むしろ今までの一律一様な教育を見直していこうということのアンチテーゼとして「一人ひとりに合った学び」という言葉が出てきているんだと思うので、その協働的な学びの要素をどう入れていくのかっていうのは、私も今すぐに答えられないですが、一緒に考えていかなきゃいけない論点だなというふうに思いました。

話しながら、最初に言おうとしたことを思い出したんですけども、付け足してお話申し上げてもよろしいでしょうか。

（茅野座長）

よろしくをお願いします。

（早坂構成員）

ありがとうございます。冒頭で、世界を子どもに用意するっていう話をさせていただきました。非常に端的に言いすぎて、ちょっと伝わりにくい表現でもあるかなというふうに思ったんですが、子どもって本当に多様なので、その子たち一人ひとりを見つつ、さっきの下山先生がおっしゃったように「多様な子どもたち」みたいにぼかすよりは、目の前にいる子どもたちをしっかりと見て、その子たちに合わせて教育プログラムを組んでいく、子ども出発のカリキュラム編成というところが大事になっていくんだろうなと、そんなふうに思いました。ただなにぶん、人も時間も予算も限られる教育の中でそれを実現していくとなったときに、誰も置いていかない、一人ひとりに合った学びの実践校を展開していく上では、人為的、作為的なプログラムの中だけで全ての子どもをしあわせにすることはできないんだろうなと思います。

そうなったときに、子どもをいかに現実と繋げていくのか。学校の世界とどう接点を持たせるのか。学校の中の学びを経由して外に出ていったときに、子どもの本当にやりたいが実現する学びのあり方ってどうやったら可能になるのか。そこを多分私達は考えていかなければいけないんだろうな、そんなふうに思いました。

最後に付け足して終わりますが、熊谷さんのおっしゃった3つのポイント、とても大事ななと思いました。繋がりとう用感と自発性とおっしゃっていただいたかと思うんですけど、いわゆる心理学でいうところの自己決定理論っていう考え方ですよ。1970年代くらいに出たものが、今でも様々な観点から実証されたり補強されたりして、人が人と繋がっていくこと、また繋がる中でやりがいとかできたという感覚を持つこと、またそれが人に言われたんじゃないなくて、島谷さんもさっきおっしゃってましたが、やりたいっていう内側から湧き上がってくる動機付けになっているかどうか。

この3つが、自ら学ぶっていうことの本質だし、この3つを押さえておくと、長野県の教育振興基本計画にある個人と社会のウェルビーイングが実現できると思うんですよ。なので、子どもたちのしあわせに結びつけていくときに、自らやっていくっていうことが大事なキーワードだなということを、改めて確認させていただきました。

長くなりましたが以上でございます。

（茅野座長）

ありがとうございます。今いくつか出てきているのが、まず我々が目指す像をネーミングとしてどう端的に表すか。多分その作業を通じて、何が大事なのかっていうことが共有されていくのかなということで、今色々と意見をいただいていますけど、続いて引き続いていかがでしょうか。

（熊谷構成員）

先生方と同様、やはりネーミングはとても重要なのかなと思います。一人ひとりに合った学びっていうのは、やはりちょっと個別に寄っているのかなと思っているわけですが、ぱっと思いついてきた中だと、「自己実現できる学校」という言葉が浮かびます。

個人と社会のウェルビーイングの実現。子どもたち自身も、ウェルビーイングという言葉を知り始めています。まずは個人的なウェルビーイングという楽しみから始まって、学級、学校、地域そして世界へという形でウェルビーイングは深化して学びも深めていると思うんですが、自らが描いた自己実現をしていくっていうことが、人生においてとても重要なのかなと感じます。自己実現という言葉は、保護者の観点からも「この学校ってそういうことができる学校なのかな」とポジティブに思えたりもしますし、子どもたちもこれから社会に出て自己実現をしていくということを踏まえると、幅広いネーミングが重要なのかなって感じたところです。ネーミングの重要性に関して私も共感しました。

（茅野座長）

ありがとうございます。私が最初に申し上げるべきだったかもしれませんが、本日第1回の会議ということで、全3回に分けてというお話もありましたが、ある程度皆様から自由な意見をいただき、ある意味第2回に向けて色々な論点、観点が出ればいいかなというふう

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第1回）
（令和6年6月18日）

に思っております。ですので、引き続き皆様から色々な意見をいただければというふうに思っています。

私も司会しているだけではなく意見を。例えば、令和の日本型学校教育という中央教育審議会の答申が令和3年に出たときには、一人ひとりの児童生徒が、自分の良さや可能性っていうものを実感できるんだということで、ある意味自分自身のことが書かれていますし、一方で他者を価値ある存在として認識して、他の人たちのいる中で自分自身の良さや可能性を見るということもいいよねと謳われていたりしますので、やっぱり他者の面、自分自身の面の両面あるのかなというふうに思っています。

続いていかがでしょうか。その他ネーミングに関わって、いくつかキーワードが出てきて、熊谷さんからは自己実現という言い方で、少し個別のニュアンスを減じるというアイデアも出てきていますけど、そんなことも含めていかがでしょうか。こんなキーワードも考えられるのでは、ということもあるかと思えます。

（島谷構成員）

まとまっていないんですけど、事務局資料の8ページには、目指したい学校像に、子どもたちの自己実現ができる学校を地域とともに創るというのが出ていると思うんですね。で、具体的要件として、手法の部分、PBLや単元内自由進度学習等が、いくつか羅列されていると思うんですけども、目指すべき像は、抽象度が高くないといけないなと思っています。手法に寄るようなネーミングにしてしまうと、それをやるのが目的化していくので、例えば自由進度を想起させるようなネーミングだと「それをやらなきゃ」という発想になってしまい、そもそも何のためにそれをやってるのかという大事なところが置いていかれてしまうことに、学校現場は陥りがちになるところがあると思う。やっぱり抽象度は少し高めに、この事務局資料の提案ぐらいのレイヤーでやれた方がいいんだろうなと思って思っています。

というのも、私、加賀市で1回、失敗したなって思ったことがあり、「例えば自由進度学習なんかも1つの例ですよ」って、どこかの場で言ったら、それが「自由進度やらなきゃ」みたいなモードでばあっと現場に拡がってしまったんですよ。それぐらい手法には目が行きがちになるのが学校現場なので、特定の手法を直結させるようなものはなるべく避けて、その辺は自由に学校に委ねていく、発案させるという、学校の主体性を引き出すような形にできたらいいんじゃないかなと思いました。すいません、抽象度高いんですけど、以上です。

（茅野座長）

ありがとうございます。私たちがよくいさめとして持っている、手法が目的化してしまうことは避けなければいけないというお話かなと思います。続いていかがでしょうか？

（早坂構成員）

島谷さんがおっしゃったことに私も基本的に賛同します。抽象度をできるだけ高める、言

い方を変えると懐の大きな理念を置いておく、ということが必要だろうと思います。

手段の目的化という議論もまさにその通りだと思いますし、加えて、長野は冒頭の事務局説明にもあったように、学校・地域の自律性がかなり強い。私、長野の外で生まれ育って、長野に引っ越してきて本当に痛感するのは、そこですよ。なので、方向性を大まかに示すことができれば、その中で、地域の実情に合わせた教育を各学校が主体的、内発的に取り組んでくださるだろうという期待感は十分に持てる土地だというふうに、私は理解しています。

なので、抽象度ちょっと高めで、というのと、逆のことを言うようですけども、今回一人ひとりに合った学びの実践校をまずはパイロット校として始めていこうとするときに、これまでの教育のあり方の見直しという、避けて通れない部分が出てくるんだと思うんですよ。つまり、学校の自主性、自発性に当然任せるし、その任せた後の面白いことが起きるだろうなというワクワク感が信州にあるのと同時に、公教育っていうのはかなり復元性が強いというか、要はこれまでやってきたことを再生産しようとする力がとても強いので、ここに新たな1歩を私達は決意とともに踏み出していくんだっていうことが、理念の中に組み込まれていないと、これもまずいんだと思うんですね。

私たちは子どものために変わっていくんだっていう強いメッセージ、ここも併せて載せていく必要があるだろうなって、そんなふうに感じました。以上でございます。

（茅野座長）

ありがとうございます。もし早坂先生こんな言葉がっていうことがあれば、御提案いただければ、皆さんの考えも広がるかなと思ったんですけどいかがでしょうか？

（早坂構成員）

学校に「変わらなければいけない」と思ってもらえるようにっていうことですよ。

（茅野座長）

そうですね。抽象度が高くて、少しインパクトがある言葉。

（早坂構成員）

学校が勇気づけられる言葉である必要があると思うんですよ。つまり今までやってきたことが否定されたり、今までやってきたことが間違いだっていうよりは、今までやってきたことを活かしつつも、大いなる未来へ向かってっていうところですよ。

ごめんなさい、ちょっと考えたいと思います。

（茅野座長）

ありがとうございます。なかなか具体化しようとすると言葉が出てこないということも

あるかもしれません。現時点では、皆さんから色々な意見を言っていただくことがいいのかなと思います。ちょっと今、ネーミングのことが頭の中にあるかと思いますが、それにとどまらず、色々意見を言っていただければと思います。しばらく議論を聞いていただいた下山先生、いかがでしょうか。

（下山構成員）

はい。私にネーミングセンスがあればと思いながら聞いてたんですけど、本当に子どもたちの学びが自己実現に貢献したらいいなというのは、すごく感じています。

どうしても私は障害のあるお子さん寄りの話になるんですが、子どもたちが苦しんでいるところは、効率性とか、有能感、有能性とか、生産性とかを求められている部分にあります。一方で、子どもがいきいきするのはどんなときかという、教育が子どものQOLに貢献したとき。子どもが、「尊重されたな」「意思決定できたな」「自分自身の自由が認められたな」と思ったときに子どもがいきいきしてるなっていうのがあって、ネーミングにもそういうニュアンスが入れられるといいなと思います。

ウェルビーイングって本当に大事なことだと思っています。たまに、今まで学校はウェルビーイングとは違うものを優先してきたところがあったんじゃないかっていうふうを感じるんですね。ですので、そういうことがネーミングに入れられればと考えております。ちょっといいのが出て来なくてすみません。

（熊谷構成員）

ネーミングに関して、具体的より抽象的というのは、なるほどと思いました。やはり何のためにこれをするかという趣旨が重要で、そこからネーミングを決めるということでもいいのかなと思いました。

思いついたことをぱっと言ってしまうんですが、ウェルビーイング実践校もいいなと思いました。個人の権利とか自己実現が保障されて、なおかつ社会的にも良い状況にしていくということ言えば、よくPTAや現場の先生方から、ウェルビーイングよりもっと分かりやすい言葉を使えと指摘されることもあります。教育委員会さんの掲げるスローガンにも個人と社会のウェルビーイングの実現と入っていますし、ウェルビーイング実践校も、なかなかいいんじゃないかって感じたところです。

（茅野座長）

ありがとうございます。カタカナ語を使ってもいいかは、事前にチェックしておいた方がいいんでしょうか？（事務局、問題なしの合図）。

何でもいいそうです。まずは皆様からの自由な意見を優先という形で良さそうです。

抽象度が高いという議論の中で、例えば仮に理想像をウェルビーイングとしたときに、ウェルビーイングになっている状況って、どんな状況でしょうか？

抽象度が高いレイヤーとセットで、例えばという例示がないと、掛け声だけで終わってしまうみたいなことも一方ではあるのかなと思いました。最初の方の議論に戻りますけど、我々が目指そうとしているものを、例えばというレベルで考えたときに、どんな状況があるんでしょうかね？「自分たちで選択できる」とか、「自己肯定感が高い」とか、「真実味がある場で学んでいる」とか、いくつかのキーワードも出てきてましたよね。

ここで思ったのは、私達が目指そうとしているもののネーミングはさておき、そういうことを頑張っている学校を後押ししようとしたときに、例えばその頑張ってる学校とは、どういう学校でしょう？我々が目指そうとしている、一人ひとりの子どもに合った学びが実現するということに向けて、こんなことに取り組んでるよねと、少し具体的なレベルで考えたときに、我々が目指そうとしていることはどんなことなのか、というところも含めて、お話頂けたらと思います。手法を目的化してはいけないってことはありましたけど、抽象度の高い議論と具体的な議論と両方織り交ぜて少しお話いただけたらなというふうに思います。いかがでしょうか？

（早坂構成員）

よろしいでしょうか。おっしゃる通り、その具体的なイメージを浮かべておく必要は、すごくあるんだと思うんですよね。その具体的なイメージを形にしたり言葉に直したりしようとするときに、私たちが気をつけなければいけないことは、まさに子どもが多様であるという現実。つまり、具体化した現実のイメージが、本当に子どもたちの多様性に対応できるものになっているのか。これは、子ども一人ひとりがイメージできていないと、なかなか難しいことなのかなと思います。

あとは、学校が存立する地域の願いですね。地域の人たちは、教育にどれくらい主体的に、エージェンシーを持って、自分事として学校に関わろうとしてくださっているのか、学校の周辺の応援団が、どんな形で学校を支え、共にあろうとしてくれているのかという熟度というか練度によっても、具体的に何ができるかというところが変わってくるんだと思うんですよね。

さらに言えば、学校の先生たちの願いでしょうか。信州で教育を担い、小・中・義務教育学校の子どもたちを支えてくださっている先生は、これからの時代を見据えて、何を願っているのか。この職員集団の願って、同じようで、学校によって、また先生方の様々な経歴やステージによっても変わってくるのかなと思うと、具体例って多様に出せるんだろうなと思ったんですね。

ここで「多様なので具体例は出せません」って言うてしまうと面白くないので、例えば、今私たちが議論している一人ひとりに合った学びが実現する学校をこれから信州で増やしていこうとしているときに、既に一人ひとりに合った学びを実現している学校、あるいはそこを目指している学校は、どんな子どもたちと向き合っていて、どんな教育課題を抱えていて、それをどんな方法や手法で乗り越えようとしていて、地域との関係性はどんなふうに出

来上がっていて、職員集団との協働はどんな形で可能になっているのかといった具合に、実践から具体を引っ張ってくる方が、市町村ごとに設置されている小・中学校を長野県として応援するときにも大事になってくると思うんですね。

つまり、現場とは違った理念を掲げて、「さあ皆さん、目指すべきはここだよ」というよりは、「今あるこの学校って、こういう点で一人ひとりに合った学びが実現してるよね、すごいよね、かっこいいよね」と言って、現場を応援というかむしろ、エールを送る。先生方の日常を一緒に支えてるんだっていうのを引き出すためにも、抽象的・理念的な具体例というよりは、今ある信州の学校から具体例を引っ張っていくということを、例えば2回目以降の議論でやれたら面白かったりするのかな、そんな風を感じました。以上です。

（下山構成員）

早坂先生の意見にとっても賛成です。インクルーシブな教育を県内に広げていくっていうことが、長野県教育委員会の大事な課題の1つにあると思うんですけど、そのときもどちらかと言うと、インクルーシブに出来ていないよねという評価が先に出ていて、だから変えなきゃいけないんだっていう論調に感じます。でも一方で、働いている先生方の話を聞いたり、実際見に行くと、出来ている部分もすごくあるんですね。それをちゃんと自分たちで位置付けることをする時間やチャンスがなくて、「言われてみればこれがそうなんです」という場面もあって、とてももったいないなって思った経験があるんです。

ですので、新しい発信ではあるものの、実はちゃんと認識してなかったけど実は既にやっていることもあるんだというのは、大事なメッセージになるんじゃないかと思います。

（茅野座長）

ありがとうございます。本日の論点の2つ目（実践校をどう創っていくか）の方には、これから実践校に手を挙げていただいて、それを横展開しようとするニュアンスもあったんですけど、そうではなくて、100%ではないかもしれないが既に取り組んでいる芽をちゃんとすくい上げて、こういうところを大事にしていきましょう、それを共有していきましょうという方法があるのではないかと。こういったお話と受け止めましたが、早坂先生、下山先生よろしいですか。ありがとうございます。

一方、長野県発ではありませんが、加賀市では既に先行して取り組まれていて、こんなこともやってるよという苦労というか苦悩もあるのかもしれないんですけど、そういった面から見て、島谷さんからお話いただくことはできますでしょうか。

（島谷構成員）

はい、ありがとうございます。すごく難しいなって、いつも私もこの立場で悩んでいるのが、ボトムアップとトップダウンのバランスなんですよ。例えば、今までの授業観とか子ども観みたいな、根っこの部分が変わらないと、一人ひとりに合った学びなんで絶対に成立

しないと思っていて。ある程度、今までの根底を覆すような方向性も見せていかないと、やっぱ自分たちも変わらなきゃ、と思わせる部分も、見せる必要はあるなと私は思っているんです。

実際にボトムアップ、実践校を手挙げ方式にしたときには、根も葉もないところから手が挙がってくることはほぼないと思っています。自分たちはこういうところを目指していますというのを持っている学校ってあると思うので、そういうところから手が挙がってきて、それをより良くしていく、そういう仕組みのようなものがつくれば、結果的には良くなっていくのかなと思うので、なんとなくボトムアップだけだとちょっと厳しいかなっていう気持ちも、現場を見ていて思うところがあります。長野と加賀市では、また状況が違うのかもしれないですけど。

今の一斉型の授業を手離していくのって、現場的には相当勇気がいる話で、でもそこを乗り越えないと学びって本当に変わらないなと思っています。その辺のバランス、今までと一緒にいいんだといったニュアンスで取られちゃうと、それはそれでちょっと違うっていうような気もしています。

この辺は、私もコントロールに無茶苦茶気を遣っている部分です。ある程度はやっぱり出していかないと、そこに向かって目指せないっていうのはあって、というところなんです。一旦お返しします。

（茅野座長）

ありがとうございます。重ねてお伺いしてはいけないかもしれませんが、トップダウンでやろうとしたときに発したメッセージ、「こういうことを目指しましょうよ」と伝えたことって、例えばどんなことがありますでしょうか？

（島谷構成員）

これ（Be the Player のビジョンブック）を、学校教育ビジョンとして出しています。これまでにはこうだったけど、これからは自分のペースで自分で学びつつ、助け合って学ぶ、みたいなことを絵にしたんです。これは、市民向けに出したもので、割と抽象度は高いんですが、みんなが目指すイメージを持てるようにすることは結構大事で、その意味でこれは成功だったなっていうふうに思っています。

確かにトップダウンの色は強いんですけども、具体的な手法はここまで出して、あとはやり方も現場に全部任せているし、いくら失敗しても責任はこっちで全部取ると言ってやってもらっているっていう感じなんですよね。

そんな感じで、加賀市では絵でやったりしていますけれど。今の議論をいろいろ考えると、長野県では77の市町村があつてかなり多様な状況で、割とボトムアップで積み上げてきたということを考えると、向かう先の手法は1つじゃないので、いくつか選択肢みたいなものがぼやっと出てきて、この辺だったら目指せるみたいなものが出るといいのかもし

れないなっていうふうに思いました。ある程度、選択肢が必要かなっていう気がしますね。

（早坂構成員）

重ねてよろしいでしょうか。今の、トップダウンとボトムアップのバランスが難しいというのは、本当におっしゃる通りだなと私も思います。

学校ごと地域ごとの多様性と、学校は自分たちで考えて回していくんだっていう自律性を持った学校がたくさんあるというのは、本当に信州の宝だと思うので、これを究極のトップダウンで潰してしまうのは、とても勿体ないと思います。かと言って、ボトムアップで全て一人ひとりに合った学びが実現するかというと、難しさもあって、やはり理念の段階では、かなりトップダウン的というか、県が主導して旗を掲げ続ける必要性はあるのだと、私は思っています。

そのときに掲げるべき旗の、トップダウンの出し方ですけど、信州の場合、先程申し上げたような77の市町村の中にある公立小・中学校が、実にカラフルに学校運営をしているので、そこを活かさない手はないというか、むしろこれを県が主導して、同じような方向にみんな向いてしまった結果、一人ひとりに合った学びが提供できないとなると、本当に笑えない話になってしまうと思います。多様性は増したまま、県が掲げるべきトップダウンの旗っていうのがもしあるとしたら、それはきっと学校の再定義っていうことなんだろうなと思うんですね。

今までやってきた学校、一律一様に子どもたちに知識を与えていくっていう学びのあり方について、冒頭で武田教育長もやや批判的に捉えていただいていたけれども、おっしゃる通りかなというふうに思います。

これから信州で学校をどうしていこうとしているのか、長野県としてどうしていこうとしているのか、学校の再定義は必要になるんだと思います。

例えば、今私たちが共通して持っているフレーズで使えるものがあるとすると、「地域とともにある学校創り」とか、「学校を核とした地域創り」、要は学校の中に閉じているだけではなくて、地域の人たちも当事者意識を持って、ともに学校に集まっていく。学校が「スクール」から何か別の訳語に、例えば「ハブ」とか「ラーニングセンター」とか、そういったものによって変わっていくんだということが、要は再定義ということだと思います。

学校の再定義が必要であれば、当然、先生の再定義も必要になりますので、信州の教員である以上、信州の先生にはこれをお願いしたいと、今までの「ティーチャー」から、もしかしたら子どもを世界に繋げる「コネクター」とか、地域の人たちと繋げるときの間に入る「コーディネーター」とか、そういった学校と先生、そして言うなれば地域も再定義した形で、県は旗を振っていく必要があるだろうなと思います。その再定義した、懐のかい定義、旗印に向かって、それぞれの学校はそれぞれの持っている資源や願いが違うので、そこに応じてそれぞれ進んでいただければいいかなと。何かそんなふうに、今島谷さんのお話を受けて思った次第です。

長くなったので最後にしますが、私は今、コミュニティスクールの仕事を長野県でやらせていただいて、長野県教育委員会の生涯学習課の皆さんと密に連携を取りながら、色々なことをやらせていただいています。言葉がすごく難しいですが、なんて言えばいいんだろう、でも語弊を恐れずに言うと、県のリーダーシップが、多分問われると思います。要は、学校の独自性、自律性というのを大切にすることは、とても大事だし外せないポイントであるということは私も同感なんですけれど、かと言って、では全てお任せというわけには、今回の話ではいかなさうなというふうに思います。元に戻ると、ボトムアップとトップダウンのバランス、ここを見ながら、県はリーダーシップを発揮していかなければならないような局面に来ているような、そんな気もしています。以上でございます。

（茅野座長）

ありがとうございます。先ほど島谷さんにお示しいただいたパンフレットのことからすると、今回の資料1で言えば、5ページでしょうか。一人ひとりに合った学びが実現する学校とは、ということで、5ページにイメージ図が出ていると思います。

ここに少しイメージが出ていて、色々な要素が出ているかなと思います。今日皆さんに、一人ひとりに合った学びが実現している学校ってこういうことです、ということをお話いただいていますけど、例えばこの図を見たときに、「ちょっとここはイメージとしてずれるんじゃないか」とか、「こういうところはもっと強調してもいいんじゃないか」とか、「もっとこういう要素を付け加えたらいいんじゃないか」とかがあれば、出しておいていただくと、第2回の会議以降についても、生産的な議論になるんじゃないかなと思いましたが、いかがでしょうか？

（早坂構成員）

私、ちょっとこの図には若干の違和感を感じている人間なんですけれども。その違和感がどこから来るのかを言語化してみると、「一人ひとりに合った学びを自ら選択できる状態」というのは、かなり多義的な言葉だと思うんですね。つまり、自ら選択できるということは、そこに選択肢が多様になればいけないということで作られている図なんだと思うんですけど、もちろん選択肢は多様になれば自ら選べないわけですが、ここで2つ、押さえなきゃいけないポイントがあるような気がしています。

1つは、自ら選択できる「状態」の方、つまり選択肢がたくさんあるというよりは、自分で考えて自分に合った学びを主体的に掴んでくれる子どもを育てなきゃいけないという視点。それをこの図にどう織り込むのかっていうのが課題のような気がしています。つまり、選択肢があれば子どもは自ら選べるのかっていうところですね。

もう1つ、私はこっちが本丸なのかなと思っているんですけど、それは主体性の概念を、私たちはもっと解像度を上げていく必要があるということなんです。つまり、指示されなくても子どもが自ら選択できる状態を仮に主体性と呼んだときに、教育社会学って主体性を

さらに2つに分けるんですよ。1つは自発性、もう1つは内発性です。

自発性と内発性は何が違うかというと、自発性は用意された選択肢の中から選ぶとすること、つまり、大人が多様にレールを敷いておくので、大人が敷いたレールのどれを走ろうかなってやるわけですよ。対して、内発性っていうのは、レールそのものを自分で敷くということです。

これ、すごく大きな違いがあると私は思っていて、選択肢を増やして選ばせることができるようになっただけでは、教育社会学で言うところの主体性の中の自発性になってしまっていて、結局選択肢は増えたけれど、以前と同じように大人がやれって言ったことをやっているに過ぎないんですよ。

選択肢を増やせば子どもは自ら選べるんだけど、選ぶことよりも、選べる状態にある。ここがやっぱり大事で、自分の頭で考えて、選択肢になれば自分で創っていかなくちゃいけない。これこそまさに、私たち大人の“生きていること”そのものですよね。今ある選択肢の中だけで、私たちは自分のしあわせを自己実現しているわけではないので、常に新しい可能性を模索して、広げて、生きているわけですから、それを教育にどう落とし込むのかが、一人ひとりに合った学びの実践校ではとても大事になるだろうな、と私は思っています。

もちろん、発達段階があるので、小学校1年生からそれをやれとは言いません。ただ、どこかの段階で、子どもが自らレールを敷くっていう、選択肢そのものを自らの意思で増やしていくという視点が、この図にどう落とし込めるかなっていうのを、ちょっと考えているところです。

（茅野座長）

ありがとうございます。まさしく一人ひとりに合った学びが実現しているとはどういうことか、ということが今のお話かなというふうに思います。

そのような形で、この図を見ながら、今みたいな話を深めていただければなと思いますが、続けていかがでしょうか？

（下山構成員）

本日の論点その2（実践校の進め方）にも少し関わっているところなのかなと思いながらお話を聞いていたんですけど、今早坂先生が言ったことと関連することを私も考えていて、例えば体験しなければ自分にとって何がいいのかわからないから、体験する必要もあるし、まず自分のことがわからなければ選ぶこともできないし。

一斉授業の良さもあるなっていうのは実は感じていて、どういうことかという、例えば仮に自由進度学習が今回の目玉として入ったとすると、それによって、今まで子どもたちが求められなかったような力が、今後はとって求められる。そうになると、今まで問題にならなかった子たちが、おそらく問題になって現れてくるだろうって考えるんですよ。

一斉授業の良さっていうのもすごくあって、なぜなら日本の先生たちは非常に授業を工夫して、子どもたちがいかに意欲的に学べるか、その授業の単元の良さを伝えるような授業研究をかなりやってくださっている。だから、たまたまそのクラスに、たまたま座っているだけで、とってもいい授業が受けられる可能性があるんですね。でも一方で、自由進度学習にしたらそういった機会は、なくなるとまではいかないけど減って、自ら学ぶことが中心になっていく。

例えば、夏休みの宿題の進め方は、自由進度学習とも言えるわけなんです。そうすると、ちゃんと40日あたりを自分で計画してできる子もいれば、最後1日、夜中まで起きてやる子もいたり、もしくはやれなくて終わる子もいたり、そういったときに何が求められるかっていうと、セルフマネジメントの力かなと思うんですね。今まで一斉授業だったら、マネジメントはほとんど先生方のお仕事だったわけです。自由進度だけじゃないグループ学習とかオンライン学習にしても、子どもたちがマネジメントするっていうことを、ある程度考えていく必要があるわけなんですよ。

実際に自由進度学習をやっている学校に見学に行かせていただいたときには、もう本当に子どもに任せていて、小学生がやれるマネジメントと中学生がやれるマネジメントはやっぱり違って、中学生の方が高度なことを求められていましたが、でもそこには全くやらない子も存在するわけですよ。そういったときに、教員は子どもたちにどういうふうに学んでもらうことができるというか。子どもも違う力が求められるし、大人も違う力が求められていくわけですよ。そのあたりも、こういった選択肢が増えることに伴って考えなきゃいけないことだな、なんて思っております。

（茅野座長）

熊谷さんにもお伺いしたいんですけど、冒頭のところで、例えば自己肯定感っていうようなお話もあったと思うんですけど、例えばポンチ絵の中では自己肯定感らしさっていうのは、あまり表現しきれてないのかもしれないし、人との繋がりっていう部分でいけば、熊谷さん明示したような人との繋がりみたいのって、うまく表現されてますかね。いかがでしょう？

（熊谷構成員）

ありがとうございます。まずこの図に関しては、オープンにしていくには時期尚早かなとちょっと感じます。先程からずっと言っている、目的というか狙いが明確になってくること、まず必要かなって思っています。

先程、長野県の特徴と教育の特徴があったんだけど、この77市町村というのは確か特徴だけど、ある意味、デメリット的な部分もあるわけですよ。最近、消滅の可能性がある地域が発表されていたけど、長野県の中にも入っている自治体がある。早坂先生が言っていた社会教育的な、いわゆる公民館活動とか、こういう部分をちょっと特徴に入れていった方が

いいのかなと、私は感じるんですね。なぜかという、新学習指導要領でも謳われている通り、社会に開かれた教育課程、これがまさに協働なんですよ。

協働というのは昔から信州においてしっかりとやってきている。また、ウェルビーイングも、(WHOで) 1947年あたりから言われているくらいの言葉ですよ。ウェルビーイングの土壌というのは、もう信州にはあると思うんですね。

大前提として、私がなぜPTAをやっているのかということ、持続可能な地域をつくるためだと思ってるんです。人口減少や高齢少子化する中で、いかに信州が持続可能に発展していくか、そのために教育っていうのは一番大事だと思っています。教育委員会さんが考えるとんがった学校というのも重要で、それを域外からぐっと生徒さんを集める、またいい先生も集める、1つ手段にも繋がっていくのかなと私は期待しております。

そうした中で、協働というか、コミュニティスクール、これがやはり、生きる力を育む中でも重要な要素になってくるのかなと思うんですね。これは、昔からあるのですが、今風に少し変えて、様々な当事者が入ってくるようにしたい。学校運営協議会も割と高齢化している中で、持続可能を考えると、様々な当事者が関わりを持ってやっていると、将来的にまちづくり協議会とかになっていって人材のサイクルが回るのではないかなと感じます。

もう1つ、やはり自己実現という部分で生きる力を育むには、やはり企業の参画が重要なのかなと思うんです。子どもたちが学ぶSDGsを、企業も真剣に取り組んでいる。そして子どもたちには、いずれは信州に帰ってきて働いてほしいという企業の願いもあったりします。信州独自の人材サイクルを考えた中で、自己実現が出来る学校、一人ひとりに合った学校づくりができると、すごく魅力的な学校になってくるのかなと感じます。

そうした中で、今はコロナ禍や働き方改革が少し弊害的になってきていて、学校・先生と地域・PTAの方々とのコミュニティがなかなかできない現状がある。そんな中で子どもたちが自己実現をしていく上では、やはり地域とか企業の要素を含めた新たなコミュニティスクールの実現とともに新しい学校創りもなされると、とてもいいのかなと思う。

この図の中には、私が今お話したようなことがあまり入っていない。まだ県の狙いを十分理解していない中で勝手に言ってますけど、長野県の特徴の部分、冒頭今お話した通りに、少し整理して入れ込んでいくことが重要なかなと感じたところです。

（茅野座長）

おそらく、資料1の5ページの左下に当該学校だけではなく地域とともに創るという言葉があり、あるいは右上の方、地域が自分事として学校と協働という文言も入れ込んであるかなというふうに思います。この辺りに込めた想いを、事務局からお話いただいてもいいかなと思ったんですが、いかがでしょうか？

（石川係長）

地域との協働の要素を入れ込んだ趣旨は、こういった学校を創るには、先生をはじめとし

た大人と申しますか、授業をする先生や、授業を支援するような人たちのリソースをある程度増やさないとできないのかなと思っておりまして。地域の皆様の協力がないと、こういった学校は創れないだろうという思いから、ちょっと少し偉そうな言い方になってしまっておりますが、「地域が自分事として学校と協働」という記載をしました。以上です。

（茅野座長）

ありがとうございます。今のお話を伺うと、少し前に早坂先生から、地域とか社会のエージェンシーに絡めて、学校の応援団というようなお言葉もいただいたと思うんですけど、そういう意味で言えば、我々が目指す一人ひとりに合った学びが実現している学校というのは、そういう地域からの応援団を受け入れようとする取組というか、そういうことも盛んになるという状態も入ってくるのかなと、お話を伺いながら思いました。

続いていかがでしょうか？この図を見ながらお話をさせていただいてますが、イメージ、まだこの辺少し変えた方がいいんじゃないか、もっとここを強調みたいなことがあったら、お話いただければと思いますがいかがでしょうか？

（島谷構成員）

すごく難しいなと思いながら聞いていたんですが、今出されているこの図は、一例だと思うんですね。こういう姿も1つのあり方だと思いますが、あくまでも一例なので、これだけ出すと、「これをやるのか」みたいな感じになるんだろうと思うんです。地域とかいろんなキーワードが出されているんですけども、それを全部取り入れた授業って、すごく難しいと思うんですね。学校の中で、そういう授業もあるし、こういう今出されてるような絵のような授業もあるし、いろんな要素がタイミングタイミングで散りばめられていくのが学校だと思っているので、全部一気にこれを実現するために地域の力も入れて、みたいな出し方にしちゃうと、結構難しいなっていう感じはします

なので、この絵はこの絵として、こういうパターンがあっても、自由に一人ひとりに合った学びを追求するっていう学校が出てきても面白いなと思うし、すでにあると思いますが、地域と一緒に探究的なものをもっととがらせてやっていきたい学校があってもいいし。イメージを出すんだったら、もうちょっとパターンがあった方がいいのかなっていう気はします。上にもう少し大きい概念があって、その下でパターンを出せると、市町村が受けたときにもうちょっと具体的に考えられるのかなと感じました。

（茅野座長）

ありがとうございます。島谷さんから、77市町村もあるから選択肢があった方がいいかもしれないよね、という御発言がありましたが、今のパターンという話に通じてくると受け止めてよろしいでしょうかね。

（島谷構成員）

そうですね。石川県って19市町あって、19市町ですらだいぶ方向感が違うんですが、自律性を大事にしてる長野県、しかも77あるとなると、この辺ははまるとか、何となく自分たちが目指してるものに近いものが少しでもあると、市町村教育委員会の受け取り方もだいぶ違うだろうというふうに思います。

今、実践校実践校って学校の話ばかりしてますけれども、市町村教育委員会が同じ方向を向いてやってくれないと絶対にうまくいかないと思います。その辺の立場も踏まえて今考えてみました。

（茅野座長）

ありがとうございます。無茶振り覚悟で島谷さんにお伺いしますが、こんなパターンがあるんじゃないかと、パターンのあり方みたいなものはありますか？

（島谷構成員）

探究やりたいとか、いやもっと自由進度で子どもたちとにかく委ねて子どもに自由度を渡していくことを目指しているとかの粒感でセットした方がいいなって、ちょっと思ったんですよね。「自由進度学習」とかって出しちゃうと、ちょっと手法に寄ってしまうので、もう一段、この（資料1の8ページ）手法例のところを、もうちょっと抽象的に言うみたいなことが大事かなっていう気がしますね。

この手法の例も、粒感がてんでバラバラだと思うんですけども。ちょっとどうまとめるかは、今すぐぱっと出ませんが、探究、子どもに委ねる度合いをもっと上げるとか、なんかそれぐらいの粒感で少し出せるといいのかな。教科横断も、1つの事例かもしれないですね。

（茅野座長）

無茶振りしてすいません。ありがとうございます。少なくとも今のポンチ絵は、どちらかという、すべてを網羅してねというメッセージ性で市町村や学校に強く受け取られてしまうかもしれないということですかね。

（島谷構成員）

ですよね。なんか、「こんなん無理や！」みたいな感じになっちゃうだろうな一と思って、もったいないなって思います。

（茅野座長）

ありがとうございます。続いていかがでしょうか？十分議論できてなくて申し訳ないんですけど、本日の論点の2つ目の議論、一人ひとりに合った学び実践校をどう創っていけばいいかについても少し話をしておきたいです。途中でも少し議論に踏み込んでいましたけ

ど、そちらの方に関わって、思っていることがあれば御意見をいただきたいんですけど、いかがでしょうか？今、島谷さんから言われた粒度絡みの事も、進め方に関わってくるかなと思いますけど、いかがでしょうか？

（島谷構成員）

つくづく思うのは、新しい取組をするときには仲間が必要だって思っていて、1校だけで何かをやりきるって結構難しいなっていつも感じているんですね。

77 バランスよく全部散りばめるってことを優先しすぎると、それぞれがてんでバラバラで横展開の力も弱くなるなと思っています。同じような方向感で頑張っているところをユニットとしてまとめていくような感じでやって、長野県は山間部が多いのでどこまでできるのかはあるんですが、行き来したり見合ったりしていかないと、実践ってよくなならないなって感じる場所があるんですね。なので、ある程度のカテゴリーに分けたときに、その中で学び合える環境を、オンラインとかもあるんで、つくっていけるようになるっていいなって思います。

何が言いたいかという、77 をバランスよくやることを優先するのか、事例を創出していくことに注力していくのかっていうのは、1つ判断が必要かなって思うふうにあります。

（茅野座長）

ありがとうございます。1つ前に島谷さんからパターンがあってもいいんじゃないかというお話もあったんですけど、場合によってはそのパターンごとにいくつかの学校が手を挙げている状態で、その中で情報共有しながら、さらに横展開を広げるみたいなイメージでしょうかね。

（島谷構成員）

はい。市町村を超えるハードルが長野県にどれぐらいあるか分からないのですが、石川県を想定した場合、市町村を越えるってかなりハードル高いなって感じています。どこかの市町村がこれをやってみたいと手を挙げたときに、複数校を入れてあげて、その中で実践を産み出していく。全県への拡がりにはかなり時間はかかると思いますが、そのエリアでの拡がり結構進むだろうなって思っています。

てんでバラバラでモデル校を創るっていうやり方は、各都道府県でいろんなことをいろんな形でやってきましたけど、それが拡がったためしはないなって思っています。やっぱり局所的にローカルでガッツと拡げるやり方を、1つやってみてもいいんじゃないかなと思います。今までうまくいかなかった反省を踏まえてっていうことで。ある程度仲間づくり、グルーピングをしていくっていうのは、結構大事かなって思っています。

（茅野座長）

ありがとうございます。今、御提案をいただいております。そのような形でも構いませんので、皆さん思っていることを出していただければと思いますが、いかがでしょうか？

私から伺ってもいいですか。下山先生、インクルーシブのお話のところ、本当はいいことやってのに残念だったという話もあったんですが、例えばそういうときって、いくつかの学校が情報共有しているみたいなことはあったんでしょうか？それがなかなかできなかったという状況でしょうか？

（下山構成員）

情報共有していたかどうかまでは把握していなかったんですけど、その学校の先生方はすごく真面目に取り組んでくださっていました。一方で、インクルーシブって新しい考え方もありますので、「新しいものだ」というイメージがすごく強くて、自分たちが今までやってきたことにインクルーシブのエッセンスが入ってるということに注目するというよりは、出来ていないことに注目していた印象です。先生方もそうだし、PTA、保護者の方もそうだったかもしれません。ただ、やっぱり出来ているところもあって。

私いつも発達障害のお子さんとお話しているので、出来ないことを強調して言われるのって、苦しいんですね。今出来ているところから始めるっていうのは、すごく大事な進め方の1つだなと思っています。そういう意味では、今やってるところをお互い見せ合うっていうのはすごく勉強になるし、見てもらうこと自体もシステムの1つに入れてほしいなと思いますね。

あと、先生方はいつも、何かいい実践校ってないですかね？って聞かれるんですね。実践校があったら県外でもいいから、海外でもいいからっていう話を言われます。そういうところに行ってみると、全部真似できるわけじゃないけど、良いところと悪いところ、自分たちの住んでるところの土壌、風土に合ってるかどうかも含めて判断できるので、そういう点も見せ合うメリットかなって思いますね。

（茅野座長）

ありがとうございます。広げるというところの難しさもあるのかなと思いました。資料1の6ページを見ていただくと、全県一律で進めるよりもパイロット校でという説明の中に、「&地域で」と入っているので、場合によっては1校だけが各エリアにポツポツではなくて、ある特定の地域でまとまって手を挙げていただいて取り組むということも視野に入っているのかなというふうに見えたんですけど。そういった点からも、また御意見いただいてもよろしいでしょうか。

（早坂構成員）

私は、この6ページ目のパイロット校&地域の部分について、ちょっと別の読み方をしておりまして、地域には複数の小・中学校があって、そのまとまった複数の小・中学校でとい

うよりは、学校発の学校教育改革の流れに、地域も、自分たちの地域にある学校を支えていくという、地域の人たちのまさにエージェンシーを持って学校と共にあるとする。この“&地域”の表記は、普段やっているコミュニティスクールの文脈から見ると、そんなふうに見えたんですね。

つまり学校創りっていうのは、もちろん学校が主体性を持って当事者意識を持って取り組まなければ進まないことではあるんですけども、その学校が存立している地域との対話なしに、その学校が、あるいは教育委員会が独自で進めていけるものでもないんだろうなっていうふうに、私は考えています。

なので、手を挙げる主体は学校であってももちろんいいですし、逆に〇〇中学校を抱える、〇〇市の〇〇地域が、私たちの地域の学校をこんなふうにしていきたいっていう形での手の挙げ方もあり得るだろうし、あったらなおさら一人ひとりの子どもに合った多様な形の学校教育が展開できる、そんなふうには私に読んだということお伝えさせていただきたいと思います。

（茅野座長）

ありがとうございます。学校群と見る、学校を支える周辺を地域と見るっていう、そういう読み取り方ですかね。

（早坂構成員）

「地域なんか学校づくりで手を挙げないよ」って思われる方も、もしかしたらいらっしゃるかもしれないんですが、信州ではそんなことないと思うんですよ。

地域の人たちが本当に自分事として学校と共にある。この実践は、私もこの長野の中で多く見せていただいていますので、地域を主体とした場合、どこが主体になるのかという難しさはあるかもしれないですけど、住民自治組織になるのか、PTAになるか、そこら辺はまだ議論が必要かなとは思いますが。

（茅野座長）

ありがとうございます。教育委員会という意味での地域もあれば、いわゆる本当にコミュニティスクールでいうところの地域という文脈もあるよ、ということで受け取らせていただきました。

（下山構成員）

今の地域の話とはちょっと違うんですけど、資料1の6ページの図を見ていて、右側の、長野県の教育の特徴として学校、教員も自律的な風土というのは、本当にその通りだなと思います。ただ一方で、新しいことや対応が難しいことに対して、学校だけ、先生だけでやってくださいっていうのが、非常に苦しい状況であるのかなとも思ってるんですね。

子どもたちが不登校になって、学校からどんどん子どもが減っていて、先生も病気になったりしてどんどん学校から減って、学校って最後誰が残るのかなってたまに考えてしまうときもあるんですけど、何が言いたいかというと、先生方が自律的であるのであれば、その自律性を支えるようなコンサルテーションを受けられるシステムっていうのを、ぜひ県にお金を出していただきたいと思うんです。

丸投げで「やってみてください。時間が来たらまた見せてください」というのではなくて、定期的にコンサルを受けながら、自分たちがやってることが価値あることなんだ、子どもにとって良いことなんだ、子どもも先生も楽しんでこのプロジェクトに参加してるんだと励ましてくれるような、位置付けてくれるようなコンサルテーションできる人をぜひ雇って、こういうところにコミットしてもらえるといいなっていうふうに思いました。

（茅野座長）

ありがとうございます。冒頭で早坂先生から、このプロセスで関係する人々がみんなしあわせになるようにっていう御発言があったと思いますけど、そこにも通じるお話かなと思いました。

申し訳ありません。あつという間の時間で、長時間にわたり活発な意見交換ありがとうございます。本日出していただきました意見交換のポイントにつきましては、事務局の方で整理いただいた上で、次回以降も引き続き実践校の理想像あるいは具体的な要件、本日具体的な要件のところまで話ができなかったんですけど、具体的な進め方に加えて、必要な支援等についても議論を進めてまいりたいと思います。

もうちょっとだけ時間がありますので、全体を通して、本日これだけはお伝えしておきたいということがあれば、御発言いただければと思いますが、いかがでしょうか？

（熊谷構成員）

すいません。先程の資料1の5ページ、ちょっと生意気なことを申してしまっって申し訳なかったなと思って。ちょっと頭の中で、協働とかコミュニティスクールのことを考えてる中で振られたものですから。自由な選択という部分でいけば、信州においてもイエナプラン、大日向小学校の学校スタイルにも似てるなっていう部分があったり、やはり何か今までと違うなっていうのをイメージさせるにはいいんじゃないかなと思いました。

私が言っていた地域とともにというのも、私が資料を大きく拡大して見ていたものですから、見切れていた部分もあって。実際そのような要素も横に入っていましたので、お話の中でちょっと失礼もあったかなと思って、お詫びしたいと思います。

県がリーダーシップを取っていくというのはとても重要だと思っていますし、私たちPTAは先生方の応援団でもありますし、子どもたちが自由に自己実現できる学校を、全国的に見てもないぐらいの学校創りにしてほしいなって感じました。以上です。

（茅野座長）

ありがとうございます。続いていかがでしょうか？

（早坂構成員）

本当に素敵な議論ありがとうございました。一言残しておきたいのは、茅野先生に最後拾っていただいた言葉ですけれども、一人ひとりに合った学びの実践校を展開することが、関係する全ての人のウェルビーイングを高めていくんだっていう、ここに繋げていきたいなと私は個人的に強く思っています。

子どものしあわせって一番大事で一番ど真ん中にあるべきですけれども、学校の先生方のしあわせが、この一人ひとりに合った学びの実践校を推進していく中で実現されるんだって、これも旗として、長野県がリーダーシップを発揮するときにぜひ伝えていただきたいメッセージかなと思っております。

学校の先生方の現状を、「集団皿まわし状態」なんて言いますよね。そこにさらに新しく回さなきゃいけない皿を増やすのかっていう話では今回はないんだと。これまでの学校を見直すことで、先生方のしあわせについても、私たちはもっと追求していきたい。だから、変わっていこう。というメッセージを、ウェルビーイングに結びつけて出していく必要があるんだろうなと、そんなふうに感じております。以上です。

（茅野座長）

ありがとうございます。他はよろしいでしょうか？それでは本当に長時間にわたる議論ありがとうございました。では事務局の方に返ししたいと思います。

（水野課長）

茅野座長を始めまして、構成員の皆様、長時間にわたりまして活発に御議論をいただき、大変ありがとうございました。では最後に、武田教育長から一言お願いします。

（武田教育長）

皆さん、ありがとうございました。茅野座長、いろんな議論を引き出していただき、ありがとうございます。

色々な御意見をいただきました。ネーミングが大切だっていうのは、まさにそうだと思います。子どもたちが協働する、関わって学ぶことなくして、個別最適な学びはありえないというようなお話があって、大事にしなきゃいけない点だなと改めて思われたところです。

それから、最後に早坂先生のおっしゃってくれたように、先生たちが今、多忙の中で日々を過ごされていることは、十分承知をしているところであります。変わっていくということが1つテーマでありますけれども、そういう新しい価値観の学校を創っていくことが、先生たちにとっても良い方向に向かっていくんだということを、強くメッセージとして出してい

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第1回）
（令和6年6月18日）

きたいし、そういうことを実現してまいりたいというふうに思います。

長野県には77市町村があって、それから今人口も減少している中で、学校を再定義していくという言葉がありましたけども、地域づくりの核として学校を創っていくことが、多分これからとても重要になってくるんじゃないかと考えていますので、地域の皆様や関係の方々と一緒に、学校を創ってまいりたいというふうに思います。

次回もまた、今日のようにいろんな御意見をいただいて、新しい長野県の教育、今までの積み上げの上にさらに上乘せした学校を創っていきたいというふうに思いますので、よろしく申し上げます。どうもありがとうございました。

（水野課長）

それでは最後になりますが事務局から連絡事項がございます。

（石川係長）

次回の日程ですが、第2回は7～8月、第3回は9月をめどに開催したいと考えております。次回以降も、長野県庁でリアルの御出席とweb会議の併用での実施を予定しております。構成員の皆さまとは、近日中に日程調整させていただきたいと考えておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

（水野課長）

それでは、これもちまして会議を終了いたします。本日は、どうもありがとうございました。